

アジア主義——竹内好の場合

Pan-Asianism : Le cas Takeuchi Yoshimi

佐々木 涇*

Thoru Sasaki

はじめに

竹内好が著した論文を中心に据えて、その考えを追跡したい。「アジア主義」に関連する論文またはエッセーの多くは1951年（40歳）以降に発表されたものである。竹内好が、魯迅に関心もち、作家の本質に迫ろうとしたことは前回までの拙論で触れてきた。すなわち竹内好が「アジア主義」の考えを明確にするためには、魯迅を論ずる必要があったのである。竹内好がとらえた魯迅の矛盾もしくは混沌が生じたのはどんな理由によるか。なぜ魯迅がそのような状態になったのか。それは魯迅には啓蒙者と文学という二つの面があるためということだ。そして問題にしたいのは、この啓蒙者という点である。啓蒙とは、開くこと、すなわち文化的、知的レベルを上げることだ。ではそのレベルとはどんな状態ということになるか。それは「近代化」ということで、竹内好の指摘である。

日本に近代化の波が押し寄せたのは明治以降である。中国でも同じ時期とみなしてよい。しかしこの波にうまく乗ることができたのは日本の方が先であり、その事実を魯迅は日本に来て知ったのだ。この波に、中国がうまく乗りたいと魯迅が考えたであろうと想像はできる。しかしながら、新しい波に揉まれた日本の作家たちの苦しみをどの程度知ったろうか。文豪と言われる日本の作家た

ちの作品に魯迅が言及するのは少ない。竹内好の報告によれば、東欧の弱小国家の作家たちに強い関心を持っていたようである。つまり近代化の波に乗れない国の作家たちである。

1 近代化とは

1) ヨーロッパの近代化

ヨーロッパの近代化で最も象徴的なことからは、科学技術の振興である。そしてその考え方を保証するのは、客観的な合理主義で、この考え方はあらゆる分野に及んでいる。この考え方をもとに、個人はむろんのこと、公的な組織も含めてあらゆる組織が、ひいては国家までもが効率を求めた競争主義を原理としてエネルギーに動き続ける。その結果、持てる国が科学技術先進国となり、持てぬ国が後進国となった。そしてその持てぬ国の領土と資源、すなわちエネルギーの元となる化石燃料の産出地をめぐる配分が争われた。それが二度に渡る世界大戦であり、今なお頻発する戦いだ。ヨーロッパの近代はまさしく現代につながる。

竹内好に捉えられ、理解されている「近代化」についての理解を試みる。すなわち「中国の近代と日本の近代」（東京大学東洋文化研究所編『東洋文化講座第三巻』「東洋的社会倫理の性格」、白晝書院、1948年。）にそってみる。竹内好が著したこの論文は「魯迅は、近代文学を建設した人

*企業情報学部教授

である。」で書き始められている。先ずこの定義について論理の展開を追う。

東洋の近代は、ヨーロッパの強制の結果である、あるいは、結果から導き出されたものである、ということ、一応は認めてかからねばならぬだろう。近代というのは、ひとつの歴史的な時代であるから、歴史的な意味で近代という言葉を使うのでなければ、混乱する。東洋にも、むかしから、ヨーロッパの侵入以前から、市民社会の発生はあった。……(略)……それでもそれは、今日の文学に無媒介につながっているものとはいえない。今日の文学が、それらの遺産の上に立っている事実は否定できないけれども、またある意味では、それらの遺産を拒否するところから今日の文学は発足しているともいえるのである。むしろ、それらの遺産が、遺産として承認されるようになったのは、つまり、伝統が伝統たらしめられたのは、ある自覚によってであって、その自覚を生み出した直接の契機は、ヨーロッパの侵入である。

ヨーロッパが、その生産様式と、社会制度と、それに伴う人間の意識とを、東洋に持ちこんだときに、今までなかった新しいものが東洋に生まれた。それをうむために、ヨーロッパはそれらを東洋へ持ちこんだのではないだろうが(むろん、今日では事情がちがう)、結果はそうだった。……(略)……ともかくヨーロッパには、それを支え、東洋への侵入を必然にする根元的なものがあつたことはたしかだ。恐らくそれは「近代」とよばれるものの本質と深くからみあっているように思う。近代とは、ヨーロッパが封建的なものから自己を解放する過程に(生産面についていえば自由な資本の発生、人間についていえば独立した平等な個としての人格の成立)、その封建的なものから区別された自己を自己として、歴史において眺めた自己認識であるから、そもそもヨーロッパが可能になるのがそのような歴史においてであるともいえるし、歴史そのものが可能になるのがそのようなヨーロッパにおいてであるともいえるのではないかと思う。歴史は、空虚な時間の形式ではない。自己を自己たらしめる、そのためその困難と戦う、無限の瞬間がなければ、自己は失われ、歴史も失われるだろう。(竹内好『日本とアジア』ちくま学芸文庫、1993。12頁)

波線部は論者がつけたものである。その波線部の「今までなかった新しいもの」とは、竹内好によれば、「『近代』とよばれるものの本質と深くからみあっている」ものである。ヨーロッパにおける「封建的なものから自己の解放」とは「自由な資本の発生」であり「平等な個としての人格の成立」である。むろん、前者の「資本の発生」とは資本主義の発生であり、キリスト教による縛りから解放された自由な考え方とあいまって、人々に新しいものを供給することで、すなわち科学的技術によって生産され流通に乗せられた商品が溢れた。その恩恵に人々はあずかり榮えた。後者は、キリスト教でいう人はキリストの子供であるという考え方がなくなったとすれば分かりやすいだろう。すなわち科学的なもの見方により、すべては神のなせる業ではないという認識が広まったのである。このような考え方が中国にもたらされ、その状況を魯迅がとらえ、中国人を作品に描きだした。阿Qを例にあげれば、古い習慣や習性と新しいもの間にあつて、新しいものに出合った阿Qが重ねる失策を提示したことで理解できよう。したがって「今までなかった新しいもの」は「近代」ということになる。そしてこの時期に新しい傾向の文学作品を著したのが魯迅であるから、この評論の冒頭にあるような表現、「魯迅は、近代文学を建設した人である」というように断定するのだ。

2) 日本と中国の近代化

中国でのアヘン戦争(1840年)はイギリスがしかけたものである。これを知って危機感を抱いたのが江戸時代末期の下級武士たちである。これをきっかけに明治維新に至る運動が展開され、以後急速に欧米の様々な面が取り入れられた。社会の制度、仕組、教育、軍事などあらゆる面に渡っている。このいわゆる文明開化に始まる欧米に追いつけ追い越せの考え方に基づいて体制を整えることが、日本の近代化である。

ならば中国の場合はどうか。アヘン戦争から始まるのであるが、中国という一枚の大きな桑の葉を欧米の数匹の蚕が食べるかのように始まった。日本も負けじと、日清、日露戦争を通じて国力を貯え、中国に進出した。すなわち中国の近代化

は、欧米列強の犠牲になりつつあった状態としてよいだろう。

日本が欧米の近代化路線、植民地獲得競争に乗り出した状態を、日本に留学している魯迅はつぶさに見ていた。傍観者として眺める自国の国民たち、そして反日を展開するにしても日本の「欧米に追いつけ追い超せ」的な発想にもとづく革命運動をも魯迅は見ている。しかし魯迅は、革命が達成されても人間の本質的な部分は変わらないとして「阿Q正伝」を著わした。

このような魯迅を見て竹内好はヨーロッパの近代化を拒否し始めたのだ。

ヨーロッパが本来に自己拡張的であることが（その自己拡張の正体が何であるかという問題を別にして）、一方では東洋への侵入という運動となって現れたことは、認めてよかろう。（他方では、アメリカという鬼っ子を生み出した。）それはヨーロッパの自己保存の運動のあらわれである。資本は市場の拡張を欲するし、宣教師は神の国をひろめる使命を自覚する。かれらは不断の緊張によって自己であろうとする。たえず自己であろうとする動きは、たんに自己に止ることを不可能にする。自己が自己であるためには、自己を失う危険も冒さなければならぬ。ひとたび解放された人間は、もとの閉鎖的な殻のなかへ戻ることはできない。動くことのなかにしか、かれは自己を保てない。資本主義の精神とよばれるものがそれだ。それは時空へのひろがりの方向において自己をとらえる。進歩の観念、したがってまた歴史主義の思想は、近代のヨーロッパではじめて成立した。それは十九世紀の末まで疑われなかった。

ヨーロッパがヨーロッパであるために、かれは東洋へ侵入しなければならなかった。それはヨーロッパの自己解放に伴う必然の運命であった。異質なものにぶつかることで逆に自己が確かめられた。ヨーロッパの東洋へのあこがれは古くからあったが（むしろヨーロッパそのものが本来的に一種の混淆である）、侵入という形の運動は近代以後である。ヨーロッパの東洋への侵入は、結果としては東洋の資本主義化の現象を起したが、それはヨーロッパの自己保存＝自己拡張を意味するものであり、したがって、ヨーロッパにとっては、世界史の進歩、あるいは理性の勝利と観念された。侵入の型は、最初は征服、

それから市場の開放の要求、あるいは人権と信教の自由の保障、借款、救済、教育や解放運動の援助などと変わってくるが、そのこと自体が合理主義精神の進歩を象徴する。よりよき完全への無限の近づきを目指す向上心、それを裏づける実証主義と経験論と理想主義、ものを等質において量的に見る科学、すべてそれらの近代の特征的な性格が、その運動のなかから生れた。（同、13～14頁）

まず引用の前半部分の理解である。「自己保存の運動」とは竹内が書いたとおりであるが、「運動」としているところに注目すれば、固定された保守的であることが否定されている。「自己保存」ということだけでは、即ち保守が強ければ専制君主を中心とした封建時代のまま続く。これが否定されるがゆえに「運動」があるわけだ。「運動」であるから動く。しかしその「動く」ということは、時と場合によっては破滅することもあり得る。動きながら常に自分であることを自分に求めているのだから、例えば、常に自分が強いということ維持し続けるならば、その強さを求めて新しいことを手に入れ、自分を強い状態にする、ということになるだろう。したがって様々な動きに対応しなければならないわけだ。そしてそれを「資本主義の精神」とする。「進歩」という概念を添えて。

この考え方を取り入れて引用文の後半が始まる。ヨーロッパの進出または拡張にその考え方は作用したのである。これを行うことでヨーロッパが自分を保存した、と竹内好は理解する。こうしてヨーロッパ以外のところで出来上がったのが、すなわち植民地であり、その獲得が競争として展開され、日本も遅れてはならないとしたのである。

そして竹内好はまとめる。

ヨーロッパの自己実現であるこのような運動が、高次の文化の低次の文化への流入、その同化、あるいは、歴史的段階の落差の自然調節として、客観的法則の形で眺められたのは、ものを等質において見るヨーロッパの目からは、当然であった。ヨーロッパの東洋への侵入は、東洋において抵抗を生み、その抵抗は当然、ヨーロッパ自体へ反射したが、それ

さえも、すべてのものを究極的には対象化して取り出しようという徹底した合理主義の信念を動かすことはできなかった。抵抗は計算されており、抵抗することによって東洋はますますヨーロッパ化する運命にあることが見とおされていた。(同、14～15頁)

この抵抗が起きると同時に「世界史そのものの矛盾」が登場したとしている。すなわち「ヨーロッパの分裂」である。ひとつは、「資本そのものを否定する方向」としてのロシア革命、二つ目は「ヨーロッパの植民地であった新大陸がヨーロッパから独立」したことである。しかもヨーロッパに対立させえた。むろん、アメリカ大陸を指している。三つめは「東洋における抵抗」である。この抵抗も竹内好は計算されたものであったという認識を示す。

ヨーロッパがどう受け取ったにせよ、東洋における抵抗は持続していた。抵抗を通じて、東洋は自己を近代化した。抵抗の歴史は近代化の歴史であり、抵抗をへない近代化の道はなかった。ヨーロッパは、東洋の抵抗を通じて、東洋を世界史に包括する過程において、自己の勝利を認めた。それは文化、あるいは民族、あるいは生産力の優位と観念された。東洋はおなじ過程において、自己の敗北を認めた。敗北は抵抗の結果である。抵抗によらない敗北はない。したがって、抵抗の持続は敗北感の持続である。ヨーロッパは一步ずつ前進し、東洋は一步ずつ後退した。後退は、抵抗を伴う後退であった。この前進と後退が、ヨーロッパにとって、世界史の進歩と観念され、理性の勝利と観念されるということ、そのことが、持続する敗北感のなかで、抵抗を通じて東洋に作用したとき、敗北は決定的になった。つまり、敗北は敗北感において自覚された。(同、17頁)

この敗北感を日本は早くから認識した。だから、日本にとって必要なことは「抵抗」ではなく、追いつけ追い越せであり、近代化されていないアジアでのなかでは、日本なりの近代の実現を試みたのである。「国威発揚」を錦の御旗に掲げて邁進したのだ。

ところで竹内好は次のようなことも書いてい

る。

ヨーロッパと東洋とは、対立概念である。近代的なものとは封建的なものが対立概念であるように。もっとも、この二組の概念のあいだには、空間的と時間的という範疇のちがいがあろう。……(略)……そもそも、このような概念的な理解が、したがってその形式のちがいを判断する力が、近代ヨーロッパ的なものであるだろう。つまり、緊張の持続の産物である。東洋には、本来にはヨーロッパを理解する能力がないばかりでなく、東洋を理解する能力もない。東洋を理解し、東洋を実現したのは、ヨーロッパにおいてあるヨーロッパ的なものであった。東洋が可能になるのは、ヨーロッパにおいてである。ヨーロッパがヨーロッパにおいて可能になるだけでなく、東洋もヨーロッパにおいて可能になる。もしヨーロッパを理性という概念で代表させれば、理性がヨーロッパのものであるばかりでなく、反理性(自然)もヨーロッパのものである。すべてがヨーロッパのものである。(同、20頁)

東洋をどのようにとらえ、どのように理解するかなどと考えること自体がすでにヨーロッパ的なのだ。ヨーロッパに出会うことがなければ東洋は東洋とはならなかったのだ。ならば、ヨーロッパなしでの東洋的なものとはどんなことか。

しかし、それがヨーロッパ的だという保証はどこにあるか。ヨーロッパ的だとか東洋的だとかいう判断の根拠は何か。真理は普遍的でないのか。私の知っていることは、それをつきつめていけば、一種の不可知論、あるいは相対論になるのではないか。これらの疑問が、私自身にも浮ぶ。おそらくそれは、認識論の問題につながるか、心理学で解かれる問題であるかもしれない。私は、認識論も心理学も知らぬから、問題をその方向に深めることはできない。それも大切だとは思いますが、私の任ではない。私はただ、自分が経験的に知っていることをもとにして、文学的直感を手がかりとして、与えられた(つまり、現在の私自身の)問題を解こうとしているだけである。……(略)……しかし、もし真理が相対的であるかないかを問われたら、現在のままでは、つまり、今日の私の環境のなかでは、そのかぎり

は、相対的であると答えるほかないように思う。…
…(略) ……魯迅を読むと、かれが私とおなじもの
を、私よりはるかに正確に感じていることがわかつたので、それによって私の経験内容は確かめられ、
問題を解く手がかりを与えられたわけである。

私は、魯迅とこのような道で出あった。(同、21～22頁)

これに続く文章で竹内好は「真理が相対的だ」という判断もヨーロッパ的ではないか、と考え始めた。そしてこのような状態は、魯迅が繰り返し書く「私は何も知らぬ」とすること、魯迅の混沌とした状態と同様であると理解する。すなわち竹内好の思索は極めて魯迅的であるといえよう。

3) 日本の侵略は近代化路線

明治以来、日本がとった膨張主義や侵略、軍国主義、とあからさまには言っていないが、竹内好によれば、これらは欧米的な近代化路線を採用したがためである。すなわち「欧米に追いつけ追い超せ」を実践するためには彼らと同じ装いをしなければならないのだ。つまり「富国強兵」だ。

ここにあるのは、欧米に追随する考え方だけに過ぎず、独自の考え方を展開できないと指摘される日本の姿がある。竹内好の指摘を見たい。

私にとって、すべてのものを取り出しうるという合理主義の信念がおそろしいのである。合理主義の信念というより、その信念を成り立たせている合理主義の背後にある非合理的な意志の圧力がおそろしいのである。そしてそれは、私にはヨーロッパ的なものに見える。私は、自分のおそれの感情を、そのものとしては気づかずに過してきた。日本の思想家なり文学者なりの多くが、少数の詩人を除いて、私を感じるようなものを感じていぬこと、かれらは合理主義をおそれていぬこと、しかもかれらが合理主義(唯物論を含めて)と称するものが、どう見ても私には合理主義に見えぬこと、を感じ、私は不安であった。そして私はそのとき魯迅に出あった。そして魯迅が、私を感じているような恐怖に捨身に堪えているのを見た。というよりも、魯迅の抵抗から、私は自分の気持を理解する手がかりをえた。抵抗ということ私を私を考えるようになったのは、それから

である。抵抗とは何かと問われたら、魯迅においてあるようなもの、と答えるしかない。そしてそれは日本には、ないか、少ないものである。そのことから私は、日本の近代と中国の近代を比較して考えるようになった。

私がそれを「東洋の抵抗」という概括的な表現で考えるようになったのは、魯迅にあるようなものが、他の東洋諸国にもあるのを感じ、そこから東洋の一般的性質を導き出せるのではないかと考えたからである。東洋の一般的性質といっても、そんなものが実体的なものとしてあるとは私は思わない。東洋が存在するかしないかという議論は、私には、無意味な無内容な、学者の頭のなかだけの、うしろ向きの議論のように思われる。そんなものが客観主義的な学問の内容のように観念されている学者の頭の構造が問題なので、そのこと自体が東洋という観念の日本におけるダラク史、したがってまた学問一般のダラク史を象徴するように思う。現に、実践面においては、そのような学問が、学問の名によって軍閥の私欲を許してき、いまま許しているではないか。(東京裁判の弁論を見よ。)東洋という観念も、他の観念とおなじように、日本の近代化の一時期には、進歩的な方向をもったように思われるが(たとえば『東洋自由新聞』のころ)、それ以後は、まっしぐらにダラクしてきている。そしてそのダラクは、ダラクの方向にある精神の主観においては、当然、ダラクと気づかれぬ。ただ、ヨーロッパにある東洋の観念(それは運動する)が投射したときに、その差が意識にのぼるが、その差を相手の進歩において自分のダラクとしてとらえる自己認識には達しない。なぜなら、そこには抵抗がないからであり、つまり、自己を保持したいという欲求がない(自己そのものがない)からである。抵抗がないのは、日本が東洋的でないことであり、同時に自己保持の欲求がない(自己がない)ことは、日本がヨーロッパ的でないことである。(同、28～29頁)

少し長い引用になったが、この部分で問題にしたいことは、合理主義と抵抗、そして竹内好のいう「ダラク」である。

まず「合理主義」を考えてみる。竹内好が恐れるのは、合理主義の「信念を成り立たせている合理主義の背後にある非合理的な意思の圧力」であ

る。この「非合理的な意思の圧力」とは何か。そもそも合理主義とは、すべてを理性でとらえ、理性で理解し、理性によって説明しようとする。すなわち、平たく言うならば、すべてを理屈で片づける、という考え方だ。むしろこの考え方は誰にも納得できるし、受け入れることができる。このことを問題にしているというわけではなく、竹内好がこの背後にあるものに対する不信の念をもっていることを表明したと言えよう。それは「非合理的な意思」であって、今上に述べた合理主義の概念とは反するものである。最も合理的なものは、宇宙を含めた自然である。だから、これらすべてが理屈で説明できるのだ。とすると非合理的なものとは何か。その最たるものは、人間の心のありようということになると思える。例えば、狼は種の違った動物を襲うが、目的はただ一つである。それは自分の生命、自分の属する種の保存のためである。それ以外に襲うことはない。人間のように趣味あるいは愉しみとして銃で動物を襲い、壁にその頭を飾ることなどはしない。あくまでも狼の行動は自然の法則にしたがう合理的なそれである。今このような例を挙げたが、仮に竹内好のいう「非合理的な意思」とは、「人間の心」としておく。端的に言うなら、ヨーロッパ人たちの意思ということになるかもしれない。

その竹内好の「おそれ」を魯迅に見出し、身悶えながら魯迅は「抵抗」しているように竹内好には思えたのである。すなわち、中国の社会および中国人が古来持ち続けていたものを容易に捨てようとはしない魯迅の姿勢を見たのだ。もとより魯迅は日本のプロレタリア作家のような作品は書いてはいない。その意味では革命作家ではないし、事実、そのような傾向のある中国人作家たちとは激しい論争をしている。その魯迅の抵抗、竹内好自身の抵抗を「東洋の抵抗」と考えてよいだろう。

次の「ダラク」は引用文でわかるように日本における「東洋」の考え方をあしざまに批判している言葉である。すなわち、日本は「自己を保持したいという欲求がない（自己そのものがない）」のであり、したがってヨーロッパのように「自己保存の運動」もしない。運動といっても全く異なる運動で、お手本を見習う、いわば「欧米に追い

つけ追い越せ」の姿勢そのものである。

2 日本の開戦と敗戦

1) 竹内好の宣言——大東亜思想の肯定

これまで見てきた論文、「中国の近代と日本の近代」は1948年に出版された『東洋文化講座第三巻』に書き下ろし、収録されたものである。したがって竹内好が到達した考えは第二次世界大戦が終わってからの、いわば総括と言えよう。苦しくも深く掘り下げた思考は、自らの来し方をどのように捉えるかをもがきつつ、われわれにその考えを示している。ここでさらに時間をさかのぼって12月8日、すなわち真珠湾攻撃による米英、すなわちヨーロッパへの宣戦布告のあとに竹内好の考えが示された文章をみる。それは、中国研究会の機関誌『中国文学』（第80号、1942年1月発行）に掲載された開戦時の宣言である。

まず最初の三行である。

歴史は作られた。世界は一夜にして変貌した。われらは目のあたりそれを見た。感動に打顫えながら、虹のように流れる一すじの光芒の行衛を見守った。胸ちにこみ上げてくる、名状しがたいある種の激発するものを感じ取ったのである。（『竹内好セレクションⅠ』日本経済評論社、2006。41頁）

この冒頭の文章は、「万歳」という掛け声が聞こえてくるような讚美の声はない。そのような思いは抑えられており、「見守った」「感じとったのである」という表現で自らの心の内を客観的に表現した文章とってよいだろう。

「宣戦の大詔」が下ったことで日本国民が一つになったとを記し、予期できない展開である、としている。これによって「囚われていた」自分たちは「積年の鬱屈」が吹き飛ばされた。これまで中国研究者は「支那事変」の扱いに苦慮しており、「すべてのものを白眼」で見ている。そして「東亜建設の美名に隠れて弱い者いじめをするのではないか」と疑っていた。ところが米英への宣戦布告は「東亜に新しい秩序を布く」「民族を解放する」と意義あることと見なし、自分たちの決意としている。戦いが始まったことを嘆くより、戦争に期待さえかけている。すなわちアジア開放

への期待である。

東亜から侵略者を追いはらうことに、われらはいささかの道義的な反省も必要としない。敵は一刀両断に斬って捨てるべきである。われらは祖国を愛し、祖国に次いで隣邦を愛するものである。われらは正しきを信じ、また力を信ずるものである。

大東亜戦争は見事に支那事変を完遂し、これを世界史上に復活せしめた。今や大東亜戦争を完遂するものこそ、われらである。(同、43頁)

すなわち、この日本の戦争行為を先にみた魯迅の抵抗と同質のもの、あるいは東洋の抵抗とみなしたのである。そして最後の段落にある文章に注目したい。

道は遠いが、希望は明るい。相携えて所信の貫徹につき進もうではないか。耳をすませば、夜空を掩って遠雷のような轟きの響するのを聴かないか。間もなく夜は明けるであろう。やがて、われらの世界はわれらの手をもって眼前に築かれるのだ。諸君、今ぞわれらは新たな決意の下に戦おう。諸君、共にいざ戦おう。(同、45頁)

この時点での竹内好の年齢は31歳である。中国関係の情報がある程度入るとは言え、世界全体が視野に入るといような情報はなかったはずだ。一方的に入ってくるのは、後でも見るが、「大東亜思想」「大東亜共栄圏」などを旗印とした考え方が中心であった。いわば多くの人が、そして竹内好も「正義の戦争」と位置づけたと言えよう。

2) 屈辱ということ

日本が敗戦した時の竹内好の思いをみる。1953年岩波書店の発行する月刊雑誌「世界」に掲載されたエッセーで「屈辱の事件」と題をつけた一文である。趣旨は8月15日の敗戦記念をどう捉えるかで、強力な「ポツダム革命」とすることができなかった悔悟に満ちている。

私の後半生は八・一五から出発している。いや、前半生も八・一五によって意味づけられるようなものだ。八・一五は、影のように全体をおおってい

る。八・一五を考えることなしに、自分についても、民族の運命についても、考えることはできない。

八・一五は決定的に重要な事件であって、その重要さが、これまで、自分だけの記録を残したいという私のこころみを、たじろがせてきた。(同、18頁)

すなわち8月15日で戦争前の竹内好とは違うことを理解すべきである。そしてこの8月15日を重大な失策ととらえていることに注目したい。

八・一五は私にとって、屈辱の事件である。民族の屈辱でもあり、私自身の屈辱でもある。つらい思い出の事件である。ポツダム革命のみじめな成りゆきを見ていて、痛切に思うことは、八・一五のとき、共和制を実現する可能性がまったくなかったかどうかということである。可能性があるのに、可能性を現実性に転化する努力をおこたったとすれば、子孫に残した重荷について私たちの世代は連帯の責任を負わなければならない。(同、19頁)

自分のみならず、日本民族の不覚だということだ。この引用文の次に出てくる「高貴な独立の心」が失われた状態だったと省みている。無論その心とは「東洋の抵抗」という言葉に象徴される心だ。毛沢東は、その意味で日本国民に期待していたにもかかわらず、と竹内好は書く。そして8月15日のことであるが、丸山真男のような体験をしなかったことを告白している。この丸山真男は、これまで新聞に登場することがなかった「民主主義」という言葉が新聞に大きく載ったのを見て感動したという。竹内好はその日のことを次のように記している。

その日の午後、私は複雑な気持ちにひたっていた。よろこびと、悲しみと、怒りと、失望のまざりあった気持ちであった。当時の心境は、今日の私にとって、まだ足を踏みいれてない曠野のように無辺のひろがりをもっている。私になみの兵隊より孤独でいられたことが、そうさせたわけだ。

天皇の放送は、降伏か、それとも徹底抗戦の訴えか、どちらかであると思った。そして私は、後者の予想に傾いていた。ここに私なりの日本ファシズム

への過重評価があった。私は敗戦を予想していたが、あのような国内統一のままで敗戦は予想しなかった。アメリカ軍の上陸作戦があり、主戦派と和平派に支配権力が割れ、革命運動が猛烈に全国をひたす形で事態が進行するという夢想をえがいていた。国内の人口は半減するだろう。統帥が失われ、各地の派遣軍は孤立した単位になるだろう。バルチザン化したこの部隊内で私はどのような部署を受けもつことになるか、そのことだけはよく考えておかなければならないが、などと考えていた。ロマンチックであり、コスモポリタンであった。天皇の放送は、こうした私をガッカリさせた。何物かにたいして腹が立ってならなかった。解放のよろこびも、生き残ったことのよろこびも、はじめはあまり実感にならなかった。私は当時、相当に非人間的であったと、いま考える。(『竹内好セレクションI』日本経済評論社、2006。22～23頁)

「非人間的」とはどんなことか。この引用文の冒頭で喜怒哀楽を記しているのだから、「非人間的」とは言えないはずだが。つまり「よろこび」は戦争が終わったことであり、「悲しみ」は敗戦であり、「怒り」は欧米への徹底抗戦をしないことに向けられ、「失望」は欧米とは異なる東亜の思想実現への失望である。竹内好自身の個人の感情である。したがって充分人間的であると言える。

しかしながら竹内好は、敗戦の混乱を予想し、それが革命に向かう反乱が起こりうると見なしていた。しかも竹内好自身はバルチザン、すなわち抵抗運動もしくは抵抗の戦いに身を投じる覚悟であった。その状態を竹内好自身は「ロマンチック」で「コスモポリタン」、すなわち国際人を自認していた。何千万という人々が戦争で疲れ切っているにもかかわらず、次の戦乱、混乱を期待していたのである。地に足のついた考え方をしていなかった。「非人間的」であったことへの反省の弁であるとして良いだろう。

竹内好にとって、屈辱とは大東亜思想が破れたことであり、真の民主主義が、毛沢東の期待に反して、日本人の発想に基づかなかったことである。

3 戦争を振り返るための検証

1) 「近代の超克」のこと

とにかく竹内好は、8月15日に打ちのめされたのだ。このときの思いを何らかの形で精算しなければならないのだが、これを果たしたのが「近代の超克」と題する文章である。この論文は、1959年11月20日付けで筑摩書房発行の『近代日本思想史講座』の第七巻「近代化と伝統」で発表された。この論文では次のような見出しで五つの部分に分かれている。

「一 問題のあつかい方について」、「二 『超克』伝説の実体」、「三 『十二月八日』の意味」、「四 総力戦の思想」、「五 『日本ロマン派』の役割」となっている。以下に引用を交えながら記す。まず一の「問題のあつかい方について」の冒頭である。

「近代の超克」というのは、戦争中の日本の知識人をとらえた流行語の一つであった。あるいはマジナイ語の一つであった。「近代の超克」は「大東亜戦争」と結びついてシンボルの役目を果たした。……(略)……

「近代の超克」という知識人ことばは、たぶん民衆ことばの「撃ちてしまん」や「ゼイタクは敵」に対応するだろう。ここで「民衆ことば」といったのは、民衆がつくり出した、という意味ではない。民衆用に支配者がつくり、それを民衆が消費した、という意味である。消費するために民衆は当然知恵をはたらかせたが、その知恵はことばにはならなかった。「撃ちてしまん」に自分の哀歎を托するよりほかに自己表現の道がなかった。「近代の超克」は、知識人が純粋に自家消費用につくり出したものだから、この点は「撃ちてしまん」とはちがうが、戦争とファシズムの記憶がまつわりついて、複雑な反応をよびおこす点は共通である。(竹内好『日本とアジア』ちくま学芸文庫、1993。159～160頁)

「近代の超克」という言葉が、戦後の時代において否定されるべき言葉であり、否定されるべき考え方として定着している、ということだ。竹内好はこの言葉も含めて考え方を検証する。

固有の意味での「近代の超克」は、雑誌『文学界』が一九四二年（昭和十七年）九、十月号にのせたシンポジウムを指す。これは翌年、単行本になって出版された。「近代の超克」ということばは、この催しによってシンボルとして定着された。

しかし、シンボルとして定着されたということは、このシンポジウムの主催者なり参加者なりが、「近代の超克」をとなえ、あるいは推進した、ということと直ちに一致はしない。つまり当事者たちに「近代の超克」を一つの思想運動にしようとする意図があったとは断定されない。これは事実にしていま私がそう判断するのである。出席者たちの思想傾向は多様であり、日本主義者もいれば合理主義者もいて、「近代の超克」という出題をめぐって各人各説を述べあっているが、結局「近代の超克」とは何かということとは明らかにされていない。お互いの間の考え方のちがいを認めあうだけに止まっている。（同、160頁）

当時の文献を探るなかで、このように「近代の超克」のいわれが「思想運動」を目的として設定されていなかった点を竹内好は明らかにしている。そしてもう一つの座談会をここに登場させている。

おなじころもう一つ「悪名高き」座談会があった。西田幾多郎と田辺元に師事するいわゆる京都学派の四人の哲学者、歴史家によって行われたもので、一九四一年から四二年にかけて前後三回『中央公論』に掲載され、これも後に最初の座談会の名をとって『世界史的立場と日本』として出版された。……（略）……「近代の超克」と「世界史的立場」とは、思想としては多くの共通点をもっており、運動としても（かりにそれを運動と見るならば）後者の出席者中二名が前者へ招聘されていて、連関がある。知識人の戦争協力を弾劾するとき、「近代の超克」と「世界史的立場」とはならび称せられるのが普通である。（同、161頁）

すなわち後者の「世界史的立場と日本」は、前者の「近代の超克」の座談会よりも早く行われていた。この二つの座談会によって一定の考え方が形成されたと竹内好は見ている。そしてシンボル

と思想と、思想の利用者を区別すべきだとする考えを表明し、次のような定義をよくできているとして紹介する。それは、文学者の小田切秀雄が1958年4月号の『文学』に書いた論文「『近代の超克』について」からの引用である。

太平洋戦争下に行われた『近代の超克』論議は、軍国主義支配体制の『総力戦』の有機的な一部分たる『思想戦』の一翼をなしつつ、近代的、民主主義的な思想体系や生活的諸要求やの絶滅のために行われた思想的カンパニアであった。当時『思想戦』を呼号していた一層粗暴な軍国主義者たち（文壇のなかにも少なからずいた）の活動にたいして、『文学界』グループを中心としたこの論議は、ヨリ知的なスマートな外見を示していたが、本質的には同じコースを進んでいたものであり、それだけに手のこんだ影響を及ぼしていた。『文明開化』と官僚主義への批判という形で日本浪漫派が行ってきた資本主義文明批判はこの論議によってヨリ広い視野のなかにひきだされ、さらに日本の近代社会とその生活・文明・芸術等における近代的な側面のいびつな展開とそれの伴った弱点がさまざまな角度から論難攻撃され、その結論として軍国主義的な天皇制国家の擁護・理論づけないしその戦争体制の容認・服従ということが思想的カンパニアとして行われたのである。（同、166頁）

大政翼賛会は1940年（昭15）に近衛内閣のもとで結成された国民統制組織である。これは、国民の心の内面を統制することはしなくても思想的な位置づけ、すなわち「錦の御旗」のもとに統一しようとする役割を果たした。これを受けて、知識人たちが「世界史的立場」と「近代の超克」をシンボルとして描き出したのである。

2) その思想

竹内好は次の「『超克』伝説の実体」の章では、座談会の構成メンバーを明らかにしながら、その参加者の考えを克明にみている。雑誌『文学界』の1942年9月号と10月号に分載された関係論文と座談会内容とメンバーの構成を見て「三つの思想の要素、あるいは系譜が組み分けられている」としている。この三派とは「文学界グルー

ブ」「日本ロマン派」「京都学派」であり、「思想としての『近代の超克』を成り立たせている」と断言している。そしてこの座談会の意図を次のように竹内好は整理している。

第一に、太平洋戦争の開始は、河上たちにとってショックであり、「知的戦慄」であったことが述べられている。その「知的戦慄」の内容は、「西欧知性」と「日本人の血」の間の「相剋」ということで説明されている。第二に、「新しき日本精神の秩序」が「国民の大部分」の間でただスローガンを「斉唱」するだけに止まっている「無気力を打破」したいという意欲が出ている。第三に、そのために専門知識人の間の「文化各部門の孤立」という壁をつき破らねばならぬ、という実践要求が出ている。こうして「文学界」の同人以外に広く呼びかけがなされ、共通の課題として「近代の超克」という目標設定がされたのである。(同、176頁)

この座談会のなかに、含意として歴史主義の克服と文明開化の否定を、竹内好は参加者の言葉や提出論文から読み取っている。しかしながら討論はうまくかみ合わず、出席メンバーの意見はそれぞれの出発点に戻ってしまったとして、いくつかの考えを紹介している。

結局、討論のおわりに各人はめいめい自分の出発点にもどった。提出論文から二、三の例をひろくと、西谷啓治は「一般に近代的なものといわれるものはヨーロッパ的なもの」であり「日本における近代的なものも明治維新以後に移入されたヨーロッパ的なものに基く」が、ただ「文化の諸部門が殆んど相互に連絡なしに離ればなれに輸入され」ているから、それを統一するために「宗教の立場」つまり「主体的無の立場」が必要であり、それは「世界史的必然」としての「大東亜の建設」に合致する、という場所にもどった。下村寅太郎は、近代の規定は西谷とおなじだが、「ヨーロッパはもはや他者ではない」から近代は否定し得ず、「近代の超克の方向は新らしき精神の概念の自覚を通してその方法を見出すべき」だという場所へもどった。吉満義彦は「神の前において西洋も東洋も一つの愛と真理の源泉に対する如く、凡てそれ自身直接に実存的課題を負うて

いる」という場所へもどった。津村秀夫は「近代精神の超克と同時に現代精神の脱却も必要」で科学は否定せねばならぬ、という場所にもどった。林房雄は「我々知識階級の大部分を、国を忘れ、大君を忘れた租界人種にしてしまった」近代文学を呪う場所へ、亀井勝一郎は「我々が『近代』という西洋の末期文化をうけた日から、徐々に精神の深部を犯してきた文明の生態」を指摘し「現在我々の戦いつつある戦争は、対外的には英米勢力の覆滅であるが、内的にいえば近代文明のもたらしたかかる精神の疾病の根本治療」だと考える場所へもどったのである。(同、179～180頁)

竹内好の紹介の仕方からすれば次の通りになるだろう。明治維新以降、日本古来の文化などは失われた。ヨーロッパ文明の到来が「日本の近代化」であり、それはありのままに受け止めながら、これを乗り越えなければならない。その理由として、ヨーロッパ文明は末期文化であり、科学は否定すべきものであるからで、それが課題である。そのためには「精神の疾病の根本治療」として「宗教の立場」あるいは「主体的無の立場」を堅持しながら、アジアは違うとする「大東亜」を建設して統一する。そのために英米勢力を駆逐するという考え方である。

3) その役割

この考え方が当時の若者たちに影響を与えたことを紹介しながら次のように締めくくる。

多くの知識青年を動かしたのはなぜか。おそらく「近代の超克」には「何となく僕等に解ったような解らぬような曖昧なところがある」(中村光夫)。その曖昧さの発揮する魔術的効力と、「文学界」の伝統をもってしなければ結集できない「知的協力」の最後の光錠こうぼうともいべき一閃のゆえではなかったろうか。事実、これ以後は敗戦にいたるまで、いかなる形でも思想形成の試みはもはや起らなかった。「近代の超克」は無内容であるが、それだけに勝手な読みがゆるされ、思想の痕跡を拡大して空虚感を埋める手がかりにすることができた。それだけにまた、一方では怨恨と憎悪的にされ、「超克」伝説のうまれる種もみずから蒔いたのである。(同、180～181頁)

戦争後の人々にとっては、「近代の超克」とは考慮する対象にならぬ、否定すべき対象と化したのである。そして次のように竹内好はまとめている。

要約すれば、「近代の超克」は思想形成の最後の試みであり、しかも失敗した試みであった。思想形成とは、総力戦の論理をつくりかえる意図を少なくとも出発点において含んでいたことを指し、失敗とは、結果としてそれが思想破壊におわったことを指す。思想としての「近代の超克」には、「文学界」グループと、京都学派と、「日本ロマン派」の三つの要素が組み合わさっていた。マルクス主義敗退後の中間的知識人のいちばん活発な活動舞台であった「文学界」が、一つは延命策として「日本ロマン派」の国体思想から自己を防衛する目的と、一つは逆に国体思想を利用する目的で、窮余の策として知性の最後のあがきを見せたのが「近代の超克」であった。……(略)……「近代の超克」思想において「日本ロマン派」は、復古の側面によってでなく終末論の側面で作用したと考えられる。「永久戦争」の理念を、教義としてでなく、思想主体の責任において行為の自由として解釈しなおすためには、どうしても終末論が不可欠だが、「文学界」的知性からは終末論の契機は導き出せない。そのために彼らは、「日本ロマン派」に力を借りようとし、いわば毒をもって毒を制しようとした。そして「近代の超克」という戯画をえがいたのである。

「近代の超克」は、いわば日本近代史のアポリア(難関)の凝縮であった。復古と維新、尊王と攘夷、鎖国と開国、国粋と文明開化、東洋と西洋という伝統の基本軸における対抗関係が、総力戦の段階で、永久戦争の理念の解釈をせまられる思想課題を前にして、一挙に問題として爆発したのが「近代の超克」論議であった。だから問題の提出はこの時点では正しかったし、それだけ知識人の関心も集めたのである。その結果が芳しくなかったのは問題の提出とは別の理由からである。戦争の二重性格が腑分けされなかったこと、つまりアポリアがアポリアとして認識の対象にされなかったからであり、……(略)……したがって、せっかくのアポリアは雲散霧消して、「近代の超克」は公の戦争思想の解説版たるに止ってしまった。そしてアポリアの解消が、戦

後の虚脱と、日本の植民地化への思想的地盤を準備したのである。(同、225～226頁)

江戸末期以来の課題が列記されているが、究極的には「東洋と西洋」の対抗関係である。この中に戦争が位置づけられたから、12月8日の万歳があり、8月15日の「屈辱」の思いがあったのだ。そして締めくくる。

「西欧的な近代主義者たち」は、私の見るところでは「決定的な敗北を自認」しなかった。なぜなら「近代の超克」の看板はかけたが、実際の思想闘争は行わなかったからである。敗北感のあるはずがない。そして敗北感のないことこそが今日の問題である。つまり敗戦によるアポリアの解消によって、思想の荒廃状態がそのまま凍結されているのである。思想の創造作用のおこりようはずがない。もし思想に創造性を回復する試みを打ち出そうとするならば、この凍結を解き、もう一度アポリアを課題にすえ直さなければならない。(同、227頁)

竹内好は、このように自らの戦争観を惑わした当時の考え方を検証したのである。別な言い方をすれば、このような検証を彼のみがするのではなく、日本全体がしなければならないという思いを持っていたはずである。それをしない限り、日本の政治に信を置くことができなかつたであろう。そして毛沢東の期待にそえることができなかつた日本人のふがいなさを見たが故に、それに応えられるような考えとは何かを模索した。

4 アジア主義

1) 「日本のアジア主義」から

『現代日本思想体系』第九巻「アジア主義」(筑摩書房、1963)に竹内好は「解説アジア主義の展望」を書いた。これが後に「日本のアジア主義」(『竹内好評論集』第三巻)と改題された。この論文の内容を確かめておきたい。簡単に言うなら、アジア主義の定義、明治以降に現れたアジア主義に関するさまざまな考え方をひもとき、最後は西郷隆盛に行き着いている。まず「アジア主義」の定義であるが、辞典類を調べ、反動思想、膨張主義、侵略主義、あるいは広域圏思想、さら

には孫文のアジア主義、ネルーのアジア主義などと並べて日本のアジア主義を扱っていることを記し、「辞典の数だけ定義の種類がある」のではないかと書いている。

そもそもアジア主義の名称そのものが雑多である。ときには「大アジア主義」ともよばれ、また「汎アジア主義」ともよばれる。「アジア」のかわりに「東洋」とか「東方」とか「東亜」の文字が使われることもある。アジア（亜細亞）を亜と略す例は「興亜」という熟語に見られ、この熟語を会名にした団体がすでに明治十年代に存在しているが、これはやはりアジア主義の団体と見なすべきだろう。中国ではアジアを「亜州」ともいうし、英語ではAsianismである。これらのうち、「汎」はPanの音訳であって、「汎スラブ主義」「汎ゲルマン主義」「汎イスラミズム」などから適用されたものだろう。このPan-ismは十九世紀末から二十世紀はじめにかけての世界的流行だったので、日本でもそのころ「汎アジア主義」という名称がはやったのではないかと思う。そして次第に「大アジア主義」に取ってかわられた。……（略）……

辞書類の説明のうちで、比較的私の考えに近いものは平凡社の『アジア歴史事典』（1959～62年刊）の「大アジア主義」の項目（執筆者は野原四郎）だった。（竹内好『日本とアジア』ちくま学芸文庫、1993。288～291頁）

竹内好は、さまざまな考え方の違いを明確にししながら、彼なりの定義を試みる。

一括するといっても、それらことごとくが同質だという意味ではない。同等と反対の千差万別であって、その千差万別の点がむしろアジア主義の特徴である。つまり、私の考えるアジア主義は、ある実質内容をそなえた、客観的に限定できる思想ではなくて、一つの傾向性ともいうべきものである。右翼なら右翼、左翼なら左翼のなかに、アジア主義的なものと非アジア主義的なものを類別できる、というだけである。そういう漠然とした定義をここでは暫定的に採用したい。

ある思想なり、ある思想家なりが、ある時期に、よりアジア主義的であるかないかを弁別することは

できるが、それは当然状況的に変化するものであるから、状況を越えて定義を下すことはできない。また、そうしないとアジア主義は捕捉できない。範疇としてアジア主義を固定する試みはかならず失敗するだろうと思う。アジア主義は多義的だが、どれほど多くの定義を集めて分類してみても、現実に機能する形での思想をとらえることはできない。これはアジア主義にかぎらず、ある意味ですべての思想に共通だともいえるが、とくにアジア主義の場合、きわ立ってその特性が強い。

ということは、アジア主義は、膨脹主義または侵略主義と完全には重ならない、ということだ。またナショナリズム（民族主義、国家主義、国民主義および国粹主義）とも完全には重ならない。むしろ、左翼インターナショナリズムとも重ならない。しかし、それらのどれとも重なり合う部分はあるし、とくに膨脹主義とは大きく重なる。もっと正確にいうと、発生的には、明治維新革命後の膨脹主義の中から、一つの結実としてアジア主義がうまれた、と考えられる。しかも、膨脹主義が直接にアジア主義を生んだのではなくて、膨脹主義が国権論と民権論、または少し降って欧化と国粹という対立する風潮を生み出し、この双生児ともいうべき風潮の対立の中からアジア主義が生み出された、と考えたい。（同、292～293頁）

他の考え方、すなわち民主主義や社会主義、ファシズムなどは、それ自体に価値を含み、それだけで「完全自足」していると、竹内好は指摘し、ところがアジア主義はそれらとは異なって、他の思想に依拠してあらわれるとみなしている。したがってアジア主義そのものの歴史的な展開をたどることはできず、歴史的な叙述も不可能としている。では、「大東亜共栄圏」思想はどうか。

第二次大戦中の「大東亜共栄圏」思想は、ある意味でアジア主義の帰結点であったが、別の意味ではアジア主義からの逸脱、または偏向である。もしアジア主義が実体的な思想であって、史的に展開されるものだとすると、帰結点は当然「大東亜共栄圏」であり、敗戦によって「思想」として滅んだということにならざるをえない。そして事実、そういう解釈が戦後の一時期には支配的だった。

アジア主義は、前に暫定的に規定したように、それぞれ個性をもった「思想」に傾向性として付着するものであるから、独立して存在するものではないが、しかし、どんなに割引きしても、アジア諸国の連帯（侵略を手段とすると否とを問わず）の指向を内包している点だけには共通性を認めないわけにはいかない。これが最小限に規定したアジア主義の属性である。とすると「東亜共栄圏」はあきらかにアジア主義の一形態ではある。

しかし実際について見ると、「大東亜共栄圏」は、アジア主義をふくめて一切の「思想」を圧殺した上に成り立った擬似思想だともいうことができる。思想は生産的ではなくては思想とはいえぬが、この共栄圏思想は何ものも生み出さなかった。この天くだり思想の担い手もしくは宣伝がかりの官僚は、一切の思想を圧殺するために「大東亜共栄圏」といういちはんだ大きな網をかぶせただけである。「大東亜会議」を開き「大東亜宣言」を発表したりしたが、これはまったく無内容なものだった。

思想の圧殺は、左翼思想からはじまって、自由主義に及び、次第に右翼も対象にされた。中野正剛の東方会も、石原莞爾の東亜聯盟も弾圧された。これらの比較的にはアジア主義的な思想を弾圧することによって共栄圏思想は成立したのであるから、それは見方によってはアジア主義の無思想化の極限状況ともいえる。（同、294～295頁）

竹内好はこの「日本のアジア主義」という論文の中で、引き続き、先に定義づけた文章にある個人名や結社名を挙げて展開されているアジア主義の考え方に触れる。しかしいずれの考え方も、アジア主義を的確に捉えるには能わず、「西郷の二重性」と小見出しをつけた最終章で明治初期に舞台は移る。そしてこの西郷隆盛をどのように受けとめるべきか、を提起している。

西郷が反革命なのではなくて、逆に西郷を追放した明治政府が反革命に転化していた。この考え方は、昭和の右翼が考え出したのではなくて、明治のナショナリズムの中から芽生えたものである。それを左翼が継承しなかったために、右翼に継承されただけである。……（略）……

西郷を反革命と見るか、永久革命のシンボルと見

るかは、容易に片づかぬ議論のある問題だろう。しかし、この問題と相関的でなくてはアジア主義は定義しがたい。ということは、逆にアジア主義を媒介にしてこの問題に接近することもまた可能だということである。われわれの思想的位置を、私はこのように考える。（同353～354頁）

西郷隆盛によって展開された征韓論について簡単に触れておく。

彼（西郷隆盛）が、一八七〇年十一月、岩倉・大久保が勅使として薩摩に来たとき示した二五カ条の改革意見書で、政体の基本を神武創業におき、西洋諸国の政治を参酌しつつ「攻戦の体を据へ、治乱政治一途に帰し、海軍を以て国家を護し、遂に攻守の権我に帰する処に目的を立」て、そのために雄藩の精兵一万を禁衛兵として「永く朝廷に名籍を連ね」る軍制を創建すべきだと主張した。「徴兵規則」に逆行する「御親兵」創設は、西郷の強硬な態度に屈して行われたものである。その西郷は、一八七一年九月岩倉に「時務建言書」と「勸農建言書」を提起しているが、それは、（一）神事にもとづく祭政一致の実行、（二）先祖以来の家伝書を集め忠孝信義の民風を作振するため篤農家を名主・組頭・農長に任命すること、（三）士族の世禄は現石一〇〇石とし、それ以下は旧来のままとして家禄税を課すこと、（四）歳入の四分の三を経常費とし、残り半分を凶年に備え、半分を出軍費にあてること等の内容からなっていた。（後藤靖「士族反乱と民衆騒擾」『岩波講座日本歴史14 近代1』岩波書店1975、285～286頁）

ここに引用した歴史学者の後藤靖の歴史的評価によれば、民衆騒擾は明治維新下の農民がさまざまな要求を求めた闘争であり、士族反乱はかつての武士の特権を回復する運動であるということだ。そして上に引用したように西郷隆盛の考えは、まさしく士族が中心となるべく軍制を中心とした考え方である。したがって、この軍制に関する考え方によって、まさしく西郷隆盛が「反革命」となる。ところが、その後この考えを明治政府が採用したのも事実であり、竹内好が指摘したとおりである。

2) 近代化の否定?

ところで竹内好の書いた文章に次のようなものがある。これは本論の冒頭で取り上げた「中国の近代と日本の近代」の中の一文である。

学問なり文学なり、要するに人間の精神の産物である文化が、追いかけてつかまえるべきものとして、外にあるものとして、かれらには観念されている。それをつかまえる努力において、かれらはじつに熱心である。追いつけ、追いこせ、それは日本文化の代表選手たちの標語だ。人に負けてはならぬ。一步でも先へ出ろ。かれらは、優等生のように、点数をかせぐ。事実また、学校時代の優等生が日本文化の代表選手になり、優等生制度と優等生精神で次代を教育した。だから日本文化は、構造的に優等生文化である。……(略)……日本の民族性は世界一優秀だ。こんな優秀な文化をさすいた日本文化の代表選手である自分たちは、劣等生である人民とは価値的にちがうものだ。選ばれたものだ。おくれた人民を指導してやるのが自分たちの使命だ。おくれた東洋諸国を指導してやるのが自分たちの使命だ、となる。これは優等生根性の論理的展開である。だから主観的にはかれらは正しい。そしてそこから、自分たちが優秀なのはヨオロッパ文化を受け入れた結果であるから、その自分たちの文化的ほどこしを、おくれた人民は当然受けるであろうし、また受けるべきだという独断的な優等生心理を反映した結論がうまれる。これも主観的には正しい。もし人民が受けることを拒むと、それは人民がバカで、優秀なものを受け入れる能力がないからであり、保守的でガンコだからだとする。こういう指導者意識は、軍人や政治家だけでなく、労働運動のなかにもある。軍人や政治家が人民を引っばろうとしただけでなく、解放運動そのものが人民を引っばる方向で、優等生心理でなされる。これは、日本では帝国大学が思想的にもっとも急進的であったこと、学生運動の闘士が思想検事として成功したこと、右翼団体の中堅に左翼出身者が有力に参加し、戦争中は作戦にも協力したこと、などと結びあって、日本文化の優等生的性格をあらわしている。日本ファシズムの根は、右翼左翼をひっくり返しての日本文化の構造そのものにあるわけだ。……(略)……

そうだ。教育は成功するだろう。敗戦の教訓に目

ざめた劣等生は、優等生に見ならって賢くなるだろう。優等生文化は栄えるだろう。日本イデオロギイに敗北はない。それは敗北さえも勝利に転化させるほど優秀な精神力のかたまりだから。見よ、日本文化の優秀さを。日本文化万歳。

もしも、敗北は優秀文化の劣等部分において負けたのではなく、優秀部分において負けたのだ、と考えたらどうなるか。そして優秀文化を拒否したらどうなるか。進歩そのものをダラクであるとして、進歩を拒否したらどうなるか。とんでもない、とかれはいうだろう。そんなことは、考えてもみられぬことだ。わざわざバカになりたがるなんて。みすみす進歩を取りにがすなんて。そんなことをしたら、劣等生はますます劣等生になってしまう。優等生がいるからこそ、敗戦をあつてに食いとめて、劣等生を救ってやれたのだ。そして、敗戦でヤケをおこして、ヤミをやったり、ストライキをやったりしている連中に、軍国主義のかわりに文化国家という目標を与えて、立ち直れるようにしてやれたのだ。それを、優秀文化を拒否しろとか、進歩を拒否しろなんて、それじゃあ文化国家でなくて非文化国家になってしまう。せっかくの好意の苦心が水の泡になるから、そんな反動的なことはやめてくれ、と優等生たちはわめくにちがいない。優等生たちばかりではない。劣等生もいうだろう。私たちがバカで、劣等生でもないものを選手にしたために負けてしまいました。せっかく応援した選手が敗れたときには、がっかりしましたが、それはニセモノだということを、ほんとの優等生が教えてくれたので、やっと元気を取りもどしました。おまえたちめいめいが優等生にならなければいけないと優等生にいわれて、そうだと思います。私たちは心を入れかえて勉強しようと思います。どうか、もう私たちが劣等生扱いしないでください。私たちが劣等生扱いしたニセモノの優等生とは縁を切ったのですから、と。

そうだ、劣等生諸君。諸君は正しいだろう。私は、もし諸君が仲間入りさせてくれるなら私も諸君の仲間にはいたい一人だが、諸君の意見をかぎりなく正しいと思う。日本の優等生文化のなかでは、そうするしか生きられないのだ。劣等生は優等生にすぎるとしか生きる道がない。もし優等生に反対すれば、優等生にやつつけられるだけでなく、劣等生からも閉め出されてしまうだろう。魯迅はこう書いて

いる。「人生でいちばん苦痛なことは、夢からさめて、行くべき道がないことでもあります。夢をみている人は幸福です。もし行くべき道が見つからなかったならば、その人を呼び醒まさないでやるのが大切です。」(「ノラは家出してからどうなったか」)

私も、夢をみていたい一人だ。なるべく呼び醒まされなくていい。「人生でいちばん苦痛なこと」をよけて通りたい。しかし私は、呼び醒まされた人を見てしまった。「夢からさめて、行くべき道がない」「人生でいちばん苦痛なこと」を体験した人を見てしまった。それは魯迅だ。私は、自分が呼び醒まされはしないかという恐怖を感じながら、魯迅から離れることはできなくなった。魯迅はこうも書いている。「私たちは、人にギセイをすすめる権利はありませんが、そうかといって、人がギセイになるのを妨げる権利も持っていません。」(同前)

魯迅は、何に呼び醒まされたか。どう、呼び醒まされたか。私はそれを、気にせずにはいられない。(竹内好『日本とアジア』ちくま学芸文庫、1993。34～39頁)

読み方によっては、乱暴のような気もする。しかしながら、説得されてしまい「納得」という思いがつかまとうのは何故だろうか。

中国の「アヘン戦争」で象徴される植民地化を拒否した江戸末期の優れた先輩たちが、明治以来実施してきたのは欧米と肩を並べることだった。すなわち竹内好の言う「優等生」である。右翼も左翼も優等生であり、戦争へと突き進んだのも優等生たちの導きだ。敗戦後には軍国主義を目指すのではなく文化国家を目標として設定したのも優等生である。このような批判は、極めて当たり前の批判である。そして劣等生は、どんな人であれ、優等生に寄り添っていかなければ生きていけない。この構造を知った今、どこから是正しなければならないのか。そのために西郷隆盛の時代までさかのぼって歴史の検証をすべきだと竹内好は主張してはいないが、考慮する必要はあるようだ。

そして優等生と劣等生との関係を知ったら、すなわちイプセンの芝居「人形の家」の主人公、ノラのように女は男の保護のもとで安住する人形ではないことを知ったら、それは引用文の表現

「夢を見ている」状態ではなくなったということである。もう一度言い換えるなら、劣等生でいることは、まさしくこの「夢見ている」状態にあることなのだ。竹内好もこの「夢見る」人たちの中に居たいとしているが、夢から醒めてどうしていいか、分からず立ち往生している人、魯迅を知り、その考えを知ってしまったのだ。

ここまで来ると、竹内好が政治に誘われても拒否し、戦後一度も中国に行くことはせず、安保闘争で死者が出たとき、都立大学の教授職を辞任したことなど、理解できるような気がする。

6 結論に代えて

竹内好のアジア主義に関する見解はどうなっているか。これまで見てきて明らかのように竹内好はアジア主義を定義づけてはいない。アジアに関するさまざまな考えを整理してきただけである。竹内好自身が何らかの思想や確信を手に入れていれば、行動していたはずである。そうかと言って虚無的なニヒリストになったわけでもない。「近代化」という概念から我々が知る竹内好の考えは、一方的にヨーロッパ的になるな、ということであろう。いやそうではなく、背後に控えている「意思」に警戒せよ、ということだろう。

近代化が現代の我々にさまざまな面で影響を与えている。ヨーロッパの近代化は、18世紀末に起きたフランス革命と19世紀にイギリスで起きた産業革命がきっかけである。それ以後の科学技術の飛躍的な発展と近代国家の形成がヨーロッパ以外の地域に次々と影響を与えた。その近代国家の膨張が未開発の地域を植民地とした。これらの歴史的経過は今更ここで明らかにする必要はないだろう。むしろその膨張がなぜ起きるか。人間の欲望以外なものでもないと思える。例えば、空を飛びたいとする人間が作ったものは飛行機である。20世紀初頭にライト兄弟が初めて成功したのであるが、それから12、3年して第一次世界大戦で使われ、空からの攻撃による破壊力が圧倒的なものとなった。このように科学技術が暴力に使われることで、悲惨な惨状が生じるようになった。科学技術による兵器産業の隆盛は「悪意」の最たるものである。ではその欲望はなぜ生じるのか。人よりいい生活をしたい、人よりいろんなものを持ち

たい、というような思いである。しかしそれも程度問題ではないか。

すなわち個人主義、利己主義、競争主義、拝金思想、権力志向、人間はむろんのこと、自然に対しての暴力的な破壊行為など、現在の地球にはびこるこれらを否定すべきであるという思いになるだろう。これらに抵抗すべきと考えても絶望感に捕らわれるのみである。その状態に陥ったのは魯迅であり、竹内好である。

ではこれを知ったわれわれは何をすべきか。今

上にあげた否定すべき事柄の逆をすればよいのだ。その一つに竹内好が知るに至らなかった現在のヨーロッパをみるべきである。ユーロという通貨の統一、さらにはユーロ憲法を制定し、共通のものとしようとしていることだ。そこに、ヨーロッパにおいて20世紀が戦争で明け暮れたことに対する反省の証しを認めることができる。その同じものをアジアで実践することが我々に課せられた使命であると思う。新たなアジア主義を明確にとらえて。